

運搬・通信・交易・旅の用具

神野善治・高橋典子

1. 運搬用具

人がモノを運ぶときに、対象となるモノを直接手で持ったり、抱えたり、肩や背や頭に載せたりできれば、特別な運搬用具は必要ない。しかし、運びにくい対象、たとえば、穀類などの粒状・粉状のモノや、水や酒などの液体は、適当な容器に入れることで運ぶことが可能になる。重量やカサが大きなモノを運ぶときにも、相応の容器や、荷をまとめるために縄や布類などが用いられるが、これらの容器や梱包資材は、そのままでは必ずしも運搬具とは言えない。恒常的に運ぶモノがあったり、遠方まで長時間にわたって運んだりする場合などに用意される容器類には、運搬に適した素材と形態と仕組みが選ばれ、さまざまな工夫が加えられて「運搬具」が成立している。単に荷をまとめる機能だけではなく、荷の種類に応じて、身体への装着が迅速かつ容易にでき、長時間の運搬に耐えられるように縄や金具、杵や板、緩衝材（クッション）などにより、身体と荷物の接触とバランスをとる配慮が加えられ、運搬用に特化された道具が生み出されて、今日まで伝承されている。これらの伝統的な運搬用具の呼称には、身体のどこを使って運ぶかで、「(背に) 負う」「(肩に) 担う」「(頭に) ささぐ」「(手で) 提げる」などの動詞を伴うものが多く、これらの地方名には、この運ぶ動作の方言が伴うという特徴がある。さらに、畜力や水力、車の利用を伴う道具類が加わって運搬用具が構成されている。(神野)

2. 通信用具

通信、情報伝達に用いられてきた民具として、まず、注意を喚起する目的で音を鳴らすものがあげられる。板木・拍子木・ほら貝・太鼓・鉦・半鐘、これらはすべて音を鳴らすことで情報を伝えたり合図を送ったりする、あるいは音を鳴らして注意を引き、そのあと何らかの呼びかけや信号を送るといふふうに使われる。集団の注意を向けたいうえで、次の行動を指示するために用いる道具には、采配などがある。

今回の一覧表ではハガキや書簡、回覧板などは除外した。博物館では、これらの資料や初期の電話機なども通信用具として分類整理されているケースがあるが、必ずしも民具として位置付けられる資料ではないこと、地域ごとの名称の差が見られないことなどの理由から除外した。(高橋)

3. 交易用具

交易、物と物の取引もしくは売買に関する用具をまとめた。まず、金融関係では商家で用いられてきた帳簿類がある。帳簿類には取引状況や金銭の出納、得意先に関する情報など商家にとって重要な記録が記されているもので、一覧表にはその代表格として大福帳と通帳をとりあげた。さらに、金銭を納める箱、銭函や千両箱、貨幣の計量具、金銭のやり取りを行う帳場に備えられている用具などを示した。

計量用具では、重さを量る「秤」と容積を量る「枡」類を中心に掲載した。何を計量するかによって各種の秤や枡類がある。長さを測る「物差し」も用途・目的によって多種多様であるが、これについては他の項目（例えば諸職の道具など）で個別にとりあげているため、本表では「物差し」として一つの項目で紹介するにとどめている。

さらに、商家の用具として看板、広告、鑑札などをとりあげた。看板は、店頭に掲げる看板や、店頭に置き置き看板など、どこに掲げるかによっていくつかの種類があり、その形態も工夫を凝らしたものがみられる。店先に吊るす暖簾も、日よけ風よけといった役割のほか、店名などをしるして看板としての機能も持つ。行商人の用いるチャルメラなどは、特徴的な音を鳴らすことで客の注意を引く宣伝用具であり、一種の通信用具ともいえる。なお、このほかにも各種の切手・手形類、証書、札類があるが、割愛した。(高橋)









4. 旅の用具

一般民衆の旅は近世以降活発になったとされる。幕藩体制下では、庶民の旅には様々な制約があったが、社寺参詣だけは特別に許可される旅であった。鉄道など交通機関が発達する以前は歩いて旅をした。そのため、旅装、足ごしらえ、持ち物など入念な旅支度を行った。旅の用具は、荷物がかさばらないよう軽量小型に作られ、道中の使用に便利なよう工夫され、安全性にも配慮したものが多く。また、旅装は、屋外を長距離歩くということから、足ごしらえを中心に、丈夫で身体を保護してくれるものが用いられた。なお、近世の旅の必需品であった関所手形や、通行切符、道中日記などは割愛した。(高橋)

名称	説明	さまざまな呼称
運搬用具		神野善治
 せおいぶくろ 背負袋	日常的に山仕事などの小道具を入れて背負って運ぶ袋。それぞれの地域にある丈夫な草・蔓・樹皮などで編んだものが各種ある。	【背負い袋】 おてご・がたまみの・つかり・つきやり・なわてご・なわてんこ・ふくろせながーで 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【背負袋】 ねごさ・ねこだ 【狩人の用具などを入れて負い行く袋】 いじごぶくろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 せおいかご 背負籠	籠の一種。荷を容れる機能とともに、背負って運搬する機能を持たせて、背負い縄を付けたり、背中にあたるクッションを供えたものがあり、大量の荷を容れられるように上方が大きく開いたものなど中に入れる荷の種類に応じて、背負い運搬に特化したものが様々ある。ショイカゴ、ニナイカゴ、ソラクチなど。	【背負籠】 いじご・えぼ・おいこ・げご・すかり・とりのす・ばんによ・ふしんかご・またかた・たす 【漁業用の背負籠】 やっさかご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 しよいこ 背負子	荷を背負って運ぶための運搬具で、荷を固定する枠と縄、両肩で背負うための縄、背中のクッションなどが一つの道具としてまとまっているのが特徴。呼称は多様であるが、民具研究の初期に関東地方の「せおいばしご（背負梯子）」が注目され、この語が研究者の間で用いられるようになった。しかし、その細長い梯子形は関東の平野部特有の形態で、大きさや形態のバランスも各地で異なり、典型的なものではなかった。ここでは背負子を項目名とした。中世の絵巻物の時代にはまだ登場しない。なお、木の股などの「爪」あるいは「ツノ」が付いたものが西日本を中心に分布するが、朝鮮半島のチゲとの関係が指摘されている。	【背負子】 いんが・うえ・うま・うまはしご・おい・おいかぎ・おいこ・おいたい・おいのこ・かすきばしご・からえご・かりやちげ・かるい・かれ・かれの・きおいこ・きかるい・しげー・しながち・せいた・せーだい・せーで・せおい・せた・せたい・せった・せつたら・せなこ・せなご・せなごーじ・せなごち・だつ・ちげ・ちげーがりや・といさん・においばしご・にこ・にだいにっこー・はしご・ひつちやい・へながち・やしうま・やしえうま・やへんろま・やせうま・やせうんま・やせんばしご・やへんま・わく・わこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【背負梯子】 おいこ・かり・かるい・かるこ・きおいこ・しよつかた・せいた・ひつちやい・やせうま・しよいこ 【背負って物を運搬する道具】 えー・おいね・おいねだ・い・おいのこ・かんがり・しがい・せつたら・しよいこ・にかわ・れんじやく 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 くさかりかご 草刈籠	主に飼料・肥料・燃料などにする枯葉や刈り草など比較的軽くてカサのあるものを背負って運ぶための比較的大型の背負籠で、目が粗く編まれ、背負い紐が付く。コノハカゴなど。	【草などを入れる籠】 かちご・かんご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 たいひかご 堆肥籠	堆肥を運ぶのに特化した口の広い籠で、竹製品もあるが、蔓類で粗く編まれたものに特徴がある。肥負子、背負い畚、ソラクチ、タガラなどの呼称がある。	【背負い畚】 いかき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【馬糞をいれて背負う具】 ちかり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かつぎだわら 担ぎ俵	主に稲藁で菰編みにした円筒形の運搬容器。担ぎ縄を肩に直接かけたり、天秤棒にかけて用いる。農作物等の運搬に使われる。	
 かつぎまた 担ぎ又	枝がY字に分かれた2本の又木の先端を結びつけ、途中に短い支え棒を縛って作った運搬具。又の部分に荷を乗せ、短い棒の部分に肩を入れて、2本の支柱を前後にして両手で持って担ぐ。比較的小さくて重い荷を、狭い道で運ぶのに適している。九州・四国・紀州の山間部にわずかに確認されているほか、中国雲南省南部などでも用いられている。	
 せなかあて 背中当	重いものや堅いもの、濡れたものなど背負うときに、予め背中に当てておき、その上から荷を縛りつけてクッションとしたもの。独立した道具として用いられるが、背負子などにその機能を付け加えたものもある。	【背中当】 きごも・けら・ごーみし・ごき・せたか・せなかあて・せなご・つんぶり・ぼんどり・じゅーろーた・せなかみの・ねごがけ 【背当】 せなご・さるっこ・ふなぼーし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 せおいなわ 背負縄	荷をまとめて背負うための縄。肩に当たる部分だけを幅広く編んだり、丈夫で使いやすくなるための工夫が込められている。背中への負担を防ぐための背中当とともに用いることがしばしば見られた。	【荷を背負うための縄】 おいそ・おいなわ・かすな・かちな・かちなわ・かちなわ・かちなな・かちななわ・かねなわ・かりな・かりなわ・かれの・かれのーくびなわ・さんびやく・せーなわ・たなわ・にな・ぼーなわ・まるけすな・まるけなわ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 あたまあて 頭当	頭当て。頭上運搬の場合、頭上の荷物の安定をよくしたり頭への衝撃を防いだりするために、布・藁などを巻いて作った、小さい輪の形をしたもの。	ワ・ワツパ・ワテ 以上、神野善治
 いきづえ 息杖	背負子で荷を運ぶときなどに手に持つ短い杖で、荷を下ろさずに休憩できるように、腰をやや下ろすと杖の先端に当たって、荷が支えられるように先端を又にしたり、やや平らに作られている。	【上部が股になった杖※休むときなどに荷を荷づえで支える。】 ごせぼー・きんま・にかけ・にかけくしき・にかけぼー・にしえん・にしえんかぶ・にすま・にんずいぼー・にんぜん・にんぜんぼー・にんぼー・ねずいぼー・ねずえ・ねずんば・ねんじよ・ねんじよー・ねんじよーぼー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【息杖・カ杖】 よちよー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）

名称	説明	さまざまな呼称
 <p>てんびんぼう 天秤棒</p>	<p>両端に荷物を吊り下げ、棒の中央を肩に担いで運ぶ運搬用の棒。肩に当たる部分が平たく削られており、歩くときに棒がたわむことで重い荷物を楽に運べるように工夫が加えられている。両端が尖った尖り棒も天秤棒の仲間であるが、棒の両端または片側を荷に直接突き挿して用いる。また両端に縄や鎖を吊り下げ、その先端に鈎をつけて荷（炭俵などの荷や水桶などの容器類など）を掛けて運ぶようにした天秤棒もある。天秤棒は肩に担ぐものが典型であるが、中央を頭上に乗せて運ぶ方法がかつて見られた。</p>	<p>【天秤棒】 あーふ・あいく・あいく・いないだし・いないぼー・いにゃおーこー・いにゃーぼー・いにゃかぎ・いにゃさし・いねざし・いねぼー・いねぼー・おーく・おーこ・おーこー・おーこのぼー・おく・おこ・おこんぼー・おんこ・かぎぼー・かじねぼー・かじぼー・かすきぼー・かすきぼー・かたぎぼー・かたぎぼー・かたねぼー・かたねぼー・かちきぼー・かちんぼー・かつぎぼー・かつねぼー・かつねぼー・かつねんぼー・かつねんぼー・かつんぼー・かどぎぼー・かんじーぼー・かんずきぼー・かんずんぼー・さし・さす・さるぼー・しないぼー・しないぼー・ずっと野ぼー・田子ぼー・田にぼー・たんぼー・たんぼー・たびおーこ・たびおく・たびよく・たびおこ・たびよこ・たんびよこ・たんびよーく・たんびよこ・てこ・とぎりぼー・とくしゃく・とくしゃくぼー・とんぎりぼー・なえざし・にない・においぼー・にないぼー・にない・にないおこ・にないぼー・にないぼー・になき・になぎんぼー・になつきぼー・にらゆぼー・はかり・はねぼー・ぼー・ぼーこ・ぼくと・ぼくとー・ぼこ・ぼで・めこぼー・めこんさす・もっこぼー・もっこぼー・もったぼー・やまおーこ・やまおこ・やまこ・やまんこ・やんもく・やんもこ・ろくしゃく・ろくしゃくぼー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【天秤棒】 いないだし・いないぼー・いねざし・おーこ・かすきぼー・かたぎぼー・かたねぼー・かたねぼー・かつぎぼー・かつねんぼー・かんじーぼー・さるぼー・たこのぼー・てんびんぼーこ・なえざし・にない・にないぼー・ぼくとー・もっこぼー・ろくしゃく・ろくしゃくぼー・やまこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>とがりぼう 尖り棒</p>	<p>棒の両端または片端が尖っていて、荷に直接突き挿してから、肩にかけて運ぶ運搬具。トンガリボウ・ツキンボウ・サシボウなどの名がある。</p>	<p>【両端のとがった天秤棒】 さし・さしのぼー・さす・やまいこ・やまおーこ・やまおこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【両端の尖った天秤棒・おうこ】 さし・さす・とんぎりおーこ・やまおーこ・やまおこ・らこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>なえかご 苗籠</p>	<p>田植えのときに、苗代から苗を運ぶための専用の籠。平たいものが多く、二つ一組で天秤棒で担ぐタイプのものが多い。</p>	
 <p>パイスケ</p>	<p>港湾での荷役作業で、石炭などを運ぶために用いられた平たい籠。筐類で編まれている。近代になって普及したもので、バスケットが訛ってパイスケの呼称になったと考えられる。</p>	<p>【土木工事で石を運ぶ竹製の畚】 でんすけ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p>
<p>てさげかご 手提籠</p>	<p>提げ手のついた小さい籠。リンゴやミカンなどの果実の採取用などに微妙に大きさや形の異なるものがある。ここでは吊り手のある籠の総称としておく。</p>	<p>【手提籠】 くもんかご・ちゃんかご・ちゃんちゃご・ぼて・ぼでー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【提籠】 くもんかご・しょーけ・ちゃんかご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
<p>こしかご 腰籠</p>	<p>腰につけ小物を入れて運ぶ小形の籠。</p>	<p>【腰に下げる袋】 こしす・こいず・さでこ・どーらん・ぼだす・やまでこ 【袋で編んだ腰につける袋】 こしーこ・こしかご・こしご・こしっこ・てご・てんご・ほーらいこ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【腰につける籠】 あじか・かけご・こしご・はけご・こしつけ・なたぶくろ・ひご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>もっこ 畚</p>	<p>藁や竹などで平たく編まれた網に荷を載せて運ぶ用具。堆肥などを入れて天秤棒で担いだり、2本の棒の間にとりつけて、二人で運んだり、袋状に編まれたものを牛の背に渡した俵の両側に付けたりして用いた。牛の背につけるタイプは、アイコンのもの形態は異なるので、もう一項目増やすべきかもしれない。</p>	<p>【畚】 あうだ・あふだ・いかきめが・いぐり・いしこ・いしっこ・いちこ・いちっこ・いもふり・えぐり・えびれ・えび・えんび・えぶ・えんぐり・えんぶ・えんぼ・えんぼり・おーだ・おーだー・おんだ・かかえもっこ・かっこ・かもち・かりこ・かるこ・きりたうら・こいどり・こいどる・こいどれ・こえどり・こえぼく・こえぼる・こえもちふご・こもたが・さらくち・さんどろ・じんきち・すーかつぶ・すご・すらくち・そらくち・たから・たなきもこ・ちゃてび・つくら・つんぐらめ・つんだめ・てご・てごっぼ・てごっべあ・てごぼ・てふご・てぼ・てんご・てんびん・てんびん・てんもこ・とっこ・なかつ・ひじこ・ふくつ・ふご・ふごどり・ぶり・ぶんない・ほごろ・ほぼら・ほぼる・ほんた・ゆぐり・いんぐり・ゆんぐり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）</p> <p>【畚】 あうだ・いぐり・いしべこ・いもふり・いんぐり・えんぐり・えんぼ・おーだ・かがり・かりこ・かるこ・こいどり・こえぼる・じんきち・すご・そらくち・つんだめ・てご・てんびん・とっこ・ひかご・ふくつ・ふくべさる・ふごろ・ぶり・へこ・ほご・ほごろ・ぼっち・ほぼる・やまおーだ・えぐり・つんぐらめ・とんびよーし・ぶんない 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）</p>
 <p>つと 苞</p>	<p>藁などの草類をまとめて、飯や納豆などの食品などを包み、縄で縛って背負って運んだり、吊り下げて保存したりするもの。ワラヅトなどという。</p>	
 <p>きんちゃくぶくろ 巾着袋</p>	<p>日常の小物を収納して持ち運べる布袋で、口を紐で縛れるように作られている。</p>	

名称	説明	さまざまな呼称
 ふろしき 風呂敷	衣類など物品を包むための正方形の布。本来は風呂場の床に敷き、着替えを包んだためにこの名があるという。めでたい図柄などを染め抜いたものがある。	【風呂敷】いたん・うちゆくい・かけの・かるしき・つみ・てーたん・てぼろ・てゆーたん・ばんかけ・ひらいた・ひらいたん・ゆーたん・ゆたん
 ておけ 手桶	水や酒などの液体を汲んで運ぶための取っ手がついた桶。手提げ桶、ミズオケなどとも呼ぶ。	【手桶】いなし・かそげ・からげ・きつだめ・こじょーけ・こんぶり・さげ・たご・たんご・ちよーで・つしけ・ておけ・てすり・てたご・てだる・にない 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 たる 樽	主に酒・醤油などの液体類を運び、保存しておくための容器で、細長い薄板（くれ材）を円筒形に組み立て、蓋となる円盤（鏡板）をはめて、竹などのタガで固定してある。中の液体を出すためには、栓を抜くか蓋を叩き壊す必要がある。	
 すみだわら 炭俵	木炭の搬出に用いられる。カヤを編んで細長い袋状にまとめ、木炭を詰めて円筒形または四角形にまとめて、口は細かい枝木で蓋をして縄で縛って塞ぐ。	
 なわ 縄	藁などの繊維を細長く撚り合わせたもの。運搬作業では荷をまとめたり、身体に固定したり、吊り下げてバランスを取ったりするときに用いる。特に、背負い運搬用に肩に当たる部分を平らに編んだ背負い縄など用途に特化した縄がいろいろある。	【縄】おねー・ついななー・はなわ・ひも 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【荷縄】おこのこ・かすな・かちなわ・かんべー・さんびやく・もとち・いなわ 【縄】がらなわ 【三本の縄をよった太い縄】はよー 【二本縫りの縄】みとらみん・みつくり以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 つな 綱	藁等の繊維を細長く、また太く撚り合わせたもの。縄より太いもの。運搬作業では荷車や橇などと牛馬を結びつけて曳く作業に用いる。	【綱】ついななー・もとつ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【綱】もとち・もどつ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 かん 環	先の尖った極く短い鉄棒に鉄の輪を取りつけたもの。伐採した材木の搬出などでは、切断面に打ち込み、丸い輪の部分にロープを縛って引き出すために用いられた。	
 そり 橇	雪や氷、あるいは材木を敷いた橇道を滑らせて荷を運ぶ道具の総称。荷を積み上げて、カスガイなどで固定する。雪上で使った雪橇・ソリ道を滑らせて下ろすキンマ（木馬）・馬に引かせる馬橇などがある。	【橇】ずーる・すり・ずり・てぞれ 【山から薪を運搬する橇】きつかけぞり 【重い木や石を運ぶため雪上を滑らせる大きな橇】しゅら 【木材を運搬する橇】たまびき 【人力で動かす橇】どーずりぞり 【木材などを運搬するため地上を滑らせる橇】どぞり・どぞり 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 きんま 木馬	木橇の一種。木材の搬出などに用いる。橇道にはバンギなどと呼ぶ丸太を地面に埋めてその上を滑らせ、沢を越えるときには丸太の橋を造って、その上に橇道を作る。基本的には傾斜を利用してはいるが、橇曳きは人力で梶棒を持って操作する。傾斜の急なところは制御のための棒を用いたり、後に所要所にワイヤーを取りつけ、これを梶棒に巻きつけてスピードを制御した。	【山から木材を運搬する橇】きうま・きじんま・きゅーま・きんま・どひき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ゆきぞり 雪橇	木材などを山から搬出するためには、冬季の雪上での運搬が有利だったので、雪橇が発達していた。橇が2本のものと、1本のものがある。	
 ばそり 馬橇	雪上で荷を乗せ、馬に引かせる運搬具。比較的大型になり、人も乗って操作する。	
 てかぎ 手鉤	大型の魚や俵や吠（かます）などを運ぶときに、鉤を品物に突き挿し、引つ掛けて手元に寄せたり、移動させたりするのに用いる短い手がついた鉤（かぎ）。テトビなどともいう。直接手で持ちにくいもの、重くて形が定まらないものが対象になることが多い。	
 まるきぶね 丸木舟	丸太を削り抜いて造られた舟。板造りの構造より丈夫であるために、岩礁海岸の磯漁に近代になっても長く用いられていた。山間部の川や湖沼でも用いられた。	【丸木舟・独木舟】うば・きらー・さばに・すぶに・すんね・ともど・むたま 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 いかだ 筏	山中から搬出する木材を平らに並べ、一定の幅と長さに合わせて、筏乗りが人力で操縦して川を下る搬出方法のひとつであるが、それ自体が一種の乗り物になっている。木材に穴を空け、門（かんぬき）を通したり、手すりをつけたり、専用の舵（かじ）をつけて操縦できるようにすることがある。	

名称	説明	さまざまな呼称
 いかり 碇	水中に投入し水底に引っ掛けて、水面や水中に浮く船や筏、あるいは漁網などを固定させる大型のカギ状の道具。船や筏などの規模により重さ・大きさ・素材が選ばれる。鉄など金属製の場合は「錨」、木製で石の重りがつくものは「碇」の漢字を使い分けることが多い。水底で土砂にカギが安定して喰い込むように鉤に交差する棒状の部材（撞木などと呼ぶ）が付く場合が多い。なお、「すばる」として類型化できる小型の碇状の民具があり、別項でとりあげている。	【錨】いから・かいて・かいで・かぎ・かたつめ・かなご・きつと・すばる・すばる・すばら・すまり・すまる・つぶら・つぶら・びよー・まけ・やまたらー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【錨】かぎ 【石で作った舟の重り】つぶら 【木に石をしばりつけた錨】きつと・ざまっか・まけ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 よつめいかり 四爪錨	鉄製の錨（いかり）の一種で、つめ（鉤の部分）が四方に出るもの。日本の伝統的な運搬船である弁財船などで多用された。水底に沈めるときに安定するよう、軸に交差する方向に木製の撞木（しゅもく）を付ける。錨網・錨蟬（錨用の滑車）など関連具がある。二方向にだけ出るものを「二つ爪錨」と呼び分けることもある。	
 ろ 櫓	和船を漕ぐための推進具。櫓とも書く。主要な2材（櫓下と櫓腕）から構成される。水中に入って水を切り、推進役を果たす櫓下は、平たい棒状で、断面が平たい菱形に近い形で、両端が尖って水を切り、8の字に回しながら漕ぐことで、プロペラと同様の推進力を生じる。もう一材の櫓腕は、櫓下と「へ」の字に曲げた角度で、タガなどと称する麻紐（のちに鉄線など）で結合される。結合点近くに、入れ子と呼ばれる部材を取り付け、その凹部を、船梁の先に付けた櫓躰に嵌めて、ここを支点として漕ぐ。櫓腕には先端近くに櫓づくという短い棒を指して、漕ぐときの握り手とし、櫓を傾けるときに力を入れるとともに、この棒に綱（早緒）を付けて船体とつなぐ。	【櫓】あきろ・あいろ・あばろ・うちろ・おーども・おもて・かい・かいろ・かける・ころ・しんぐ・すざく・ともど・とも・ともろ・はつきき・はどろ・ふるろ・まえどーろ・まえる・りゅー・わきろ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 かい 櫂	古来から用いられてきた船の推進具の一つで、棒状で先端が平らに削られ、手元にT字型に短い握り手が付く。船縁に綱の輪をとりつけ、その輪に櫂を差し、櫂を8の字に練ることで推進力が得られる。櫓はこの櫂から変化し発達したものと考えられている。ただし、大型の船でも、櫂は複数併用され、磯漁などで小周りの効く操作には櫂が用いられてきた。ちなみに、ボートの推進具としてオールが知られている。先端が篋状の棒の途中を支点にして、漕ぎ手が後ろ向きに漕ぐ方式である。前者は櫂（英語ではpaddle）、後者はオール（oar）と呼び分けておこう。日本では櫂は縄文時代の丸木舟にも付随して出土している。	【櫂】うえーく・おやこ・さつけ・へらがい・やく・やふ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かじ 舵	櫓とも書く。船尾の櫓床に差し込み船の進行方向を操作する。船を浅瀬に泊めたり浜へ曳き上げたり、漁をしったりする際には取り外せる。	
ともつな 罫網	船を岸につなぎ止める網。	【船をつなぐ大罫・ともつな】かがそ・かすな・ごーど・すくり・はずな 【舟のいかり網やとも網など】かがす・かがそ・かすな・ごーど・すくり・はずな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ふなじしゃく 船磁石	航路や方位を知るため、大形和船に取りつけていた計器。現在の羅針盤に相当するもの。	
 ふんだんす 船箆笥	千石船など大形の廻船に積み込み、船旅に必要な帳面・衣装などを入れて運んだ小形の箆笥。衝撃にも耐えられるよう頑丈につくられている。	
 ねこぐるま 猫車	人力で荷を運ぶための一輪車の仲間。車輪が中央の一つだけあり、後部の二つの取っ手を人が持ち上げて、押すようにして運ぶ。一輪のため狭い道でも自在に運べる利点がある。ネコとも。	
にぐるま 荷車	重量物を載せて運ぶ車。一般には人力で引く車を指し、馬に引かせるのを馬車、牛に引かせるのを牛車という。	【荷車】おこのぼ・しゃりき・てぐいま・てぐるま・たぐるま・どんぐるま・にはしゃ・べか・ものぐさぐるま・よつぐるま・よつで 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 だいはちぐるま 大八車	荷車の一種で、人力で引くもの。二輪車が主で、馬力など畜力を用いるものには四輪の荷車もある。	

名称	説明	さまざまな呼称
通信用具		高橋典子
通信		
 ばんぎ 板木	通信用具の一種で、叩くことで合図を送る板。盤木とも表記される。火事や緊急の出来事に際し、人々を招集するためや、時刻を知らせる目的として使われた。ムラの中心部に設けてあることが多い。また、学校で始業終業を知らせるためにも用いられた。	
 ひょうしぎ 拍子木	方柱形の一对の角棒で、これを打ち合わせて合図する道具。よく響く音を出すために、堅木で作られることが多い。芝居や相撲などでも使用されるが、主として夜回りの警戒に打ち鳴らされる。	【拍子木】たぐ・てぎ・てんぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 ほらがい 法螺貝	法螺貝は、日本近海で捕れる最大級の巻貝。この貝殻を楽器として加工し、山伏の修行や戦陣での吹奏用、また村役人の合図のほか、通信用具として利用してきた。	
 さいはい 采配	古くは戦の集団行動を指揮した用具であるが、漁撈活動などでは網や船の操作の指揮に用いられた。30 cm程の柄に細い布や紙、動物の毛などを房状に垂らしたものなどがある。	
 たいこ 太鼓	打楽器のうちの膜鳴楽器の総称。1~2枚の膜を胴や枠に張り、これを打って音を出す。楽器のほか、合図や信号用として使用される。	【太鼓】だいどー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 かね 鐘	金属製の体鳴楽器（打楽器）で、芸能で使用するほか、行事の合図にも使用される。	【鐘・鉦】かかん・かんしょ・きゃんきゃん・つきがね 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操篇）
 はんしょう 半鐘	小型の釣鐘で、古くは寺院や戦陣での合図に使っていたが、のちには火事などの警報として打ち鳴らされるようになった。ムラの中の火の見やぐらや火の見梯子に吊るしてあり、緊急時に鳴らして人々に合図する。また、鳴らし方を変えることによって、災害の内容を伝えた。	
情報		
こうさつ 高札	法度（法・禁令）などを人々に知らしめるために、ヒノキなどの板に墨書して、町辻、橋詰など人目につきやすい場所に高く掲示したもの。	
はた 旗	布や紙などに文字や絵を描いて竿につけ、標識あるいは象徴として掲げるもの。本来は神霊を招き祀るための依代であったが、それ以外にも用いられるようになった。	
 こうどけい 香時計	抹香・線香の燃焼速度が一定であることを利用して時間を計る道具。灰の上に抹香をひと続きの線状に置き、一端に火をつけて、燃える長さで時間を知る。時香盤・香盤などともいわれる。抹香をすえるための付属具を伴う。	



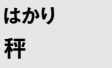

名称	説明	さまざまな呼称
----	----	---------




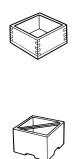








交易用具		高橋典子
-------------	--	------




帳場用具		
-------------	--	--

 ちようぼ、ちようめん 帳簿、帳面	物事を書き控えておくために、紙を必要枚数綴り合わせて作った冊子。商取引する業種には事務記録簿として不可欠の必需品。商家にとって、帳面のなかでも大福帳、通帳、仕入帳などの記録簿はもっとも重要なものであった。	
 だいくちよう 大福帳	売買と金銭の出し入れとを兼ねて記す商業帳簿で、元帳、大帳ともよばれた。江戸時代から明治時代にかけて使用された。顧客との取引状況がすべてわかるようになっており、商家にとってもっとも重要な帳簿の一つであった。	
 かよいちよう 通帳	現金売買でなく掛売り商売で使用される帳面。店名と顧客の名前が明記されており、日付・品名・金額などを記入し、盆暮れや月ごとに決済するための覚えとした。	
 ぜにばこ 銭箱	小銭を入れるのに用いた堅木製の箱で、施錠できる仕組みや、錠打ちをして頑丈なつくりがなされている。小銭を投げ入れやすいように、銭の投入口を漏斗型にしたものもある。明治になって手提げ金庫が普及すると使用されなくなった。	
 せんりょうばこ 千両箱	江戸時代、金貨の貯蔵および運搬に用いられた箱。千両分の大判・小判・一分金などを収めるもので、定型はないが、堅木で頑丈につくってあった。	
 ちようばこうし 帳場格子	商家において、帳付けをしたり金銭出納をする帳場を仕切るために設置した木製の衝立。帳場格子の内側に入れるのは店の主人もしくは番頭に限られる。	
 ちようばづくえ 帳場机	商家などの帳場で、勘定をしたり帳簿をつけたりするための机。帳場格子で仕切った空間に置いて用いた。	
 ちようばだんす 帳場筆筒	商家などの帳場に置かれた小形の書類筆筒。重要な帳面や証文、印鑑などをしまっておくために、鍵のかかる引き出しや扉が多く設けられており、凝った造りのものも多い。	【帳簿を入れる筆筒】ちよーだんす 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）
 ぜにさし 銭差	穴あき銭をまとめて一束にするのに用いる縄や麻のひも。百文差、三百文差、一貫文（千文）差などがあつた。百文差は、実際には96枚の銅銭がまとめられており、両替商があらかじめ手数料分を差し引いていたものである。	
 くすりだんす 薬筆筒	各種の薬品を分類、整理して収納しておく専用の筆筒。同じ大きさの小引出が数多く設けられており、それぞれの品名が書かれた紙を張り付けている。引き出しの数が多いことから「百目筆筒」との名称もある。	

計算・計量・測量用具		
-------------------	--	--

 そろばん 算盤	軸に通した珠を移動して加減乗除をする、計算用具。梁と呼ばれる横板の上側を天、下側を地と称し、現在の一般的な算盤では、天に一珠、地に四つ珠を設けてある。これは昭和10年に小学校で珠算教育が導入されてからのことで、それ以前は地が五つ珠の算盤が使われていた。	【算盤】がってん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）【算盤】がってん・しなばん・ろくろ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ぜにます 銭枧	硬貨の枚数を数えて素早く計算するための用具。平板状の表面に、各種硬貨の寸法に合わせて縦横に仕切りをつけてあり、これにいっぱい並べることで容易に計算できる仕組みになっている。流通している硬貨ごとに専用の銭枧があり、商店、金融業では必須の道具であった。	
 はかり 秤	物の重量をはかる器具。てこの原理を用いる棹秤（棒秤）と、天秤による平衡を用いる天秤秤、ばねの伸びを利用するばね秤がある。棹秤や天秤秤では、目方の単位になる錘（おもり）・分銅と比較してその物の目方を知る。	【秤・衝器（大形のもの）】きんりょー・ちぎ・ちぎり 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 さおばかり 棹秤	物の重さをはかる器具。重量をはかる目盛をつけた竿の一端に皿もしくは鉤を設け、はかる物を皿にのせる、もしくは鉤に吊るす。その近くを取っ手があり、この取っ手の紐を支点とし、竿の反対側におもりを吊り下げ、このおもりを移動させて水平を保つ位置の目盛から重さを知る。はかる物によって、小型のものから大型のものまである。大型のものは棒秤ともいう。	

名称	説明	さまざまな呼称
 きぬばかり 絹秤	生糸（絹糸）の重さをはかる秤。問屋や仲買が買い取る際、専用のケースに入れて携行した。	
てんびんばかり 天秤秤	中央を支点とするでこの原理を用いて物の重さをはかる道具。皿の一方に、目方をはかろうとする物を載せ、もう一方の皿に分銅をのせて釣り合うところで物の重さを知る。貴金属や薬剤の計量に用いられ、特に両替商の欠かせない道具であった。	
 だいばかり 台秤	計量するものを載せる台がついた秤。棹秤の原理を用いるものと、ばねを利用するものがある。比較的大型のものををはかる際に利用される。	
 ふんどう 分銅	秤でものの重さをはかるとき、基準とするおもり。本来、分銅とは、天秤秤で重さをはかる際に質量基準となる金属塊を指し、一般には公称値が1g、2g、5g、10g、20g、50g……の系列にあるものをいう。その規定を外れるものがおもりである。	【分銅・おもり】こ・ちきりのこ・どっぶん・どびちん・どんべ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 ます 枡	穀物や食塩、酒などの体積をはかる道具。基準となるのは一升枡で、一斗枡、一合枡、五合枡などがある。ヒノキや杉などの木製で、形態は方形。明治以降、一斗枡には曲げ物や桶による円形の枡が出現した。また、五合以上の穀物用枡には対角線に弦鉄物と呼ぶ弦を渡すように定められている。その他、特殊な枡としては、小魚や貝類をはかるけんち枡や、繭をはかる紙枡がある。	【枡】こーばん・ちよーばん・ちよばん・つが・はてい 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 えきます 液枡	酒や醤油、酢や油などの液体をはかる枡。木地のままのものや漆物がある。指をぬらさないため角に細い棒を垂直に取り付けたものや底板に長い薄板を取り付けて柄としたものがある。	【液体をはかる枡】かいぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
はかりかご 計籠	摘んだ茶葉の重さをはかるのに用いる籠。問屋で茶をブレンドするときには、和紙を貼り、渋を塗った重さの決まった籠を使用した。	
 とおい・とます 斗桶・斗枡	米などの穀物をはかるための容器。一斗（約18ℓ）分の量をはかることができる。	
 とかき 斗搔	米や豆などの穀類を枡ではかるときに使用する30cmほどの丸い棒で、斗桶や枡に入った穀類の余分な盛り上がり均す。	
 ものさし 物差し	長さをはかる道具。定規（じょうぎ）、矩（く）ともいう。表面に目盛を刻んだ棒状のものやひも状のものがある。裁縫用の鯨尺、大工道具の曲尺など各種ある。	
 ぶんまわし ぶん回し	円を描いたり、線分の長さを移すのに用いる器具。コンパス。規（き）ともいう。	
看板・広告類		
かんばん 看板	商店や職人の店などに掲げて屋号・商品・職種などが人目につくよう、広告するもの。木の板に文字を書いたものが一般的かつ古い。江戸時代中期から明治初期にかけて、さまざまに工夫を凝らした看板が作られた。	
ひきふだ 引札	江戸～大正時代にかけて、商品の広告や開店披露、特別の売り出しなどの記事内容を載せて配られた印刷物。今日のビラ・チラシと呼ばれるものと同様のもの。	
 のれん 暖簾	商家で屋号や店名などをしるし、軒先や店の出入り口にかけておく布。古くは寺院などで、風よけ日よけとして吊るした帳のことをいった。	
 さかばやし 酒林	杉の葉をまとめて球形にし、酒屋の軒先に吊るしたもの。もとは新酒の出来を祝ったもののものであるが、それが酒屋の印とみられるようになった。	
 チャルメラ	木管楽器の一種で、夜なきそば屋、飴売りなどの行商人が用いて、その特有な音色で注意を引き、客寄せとした。唐人笛とも呼ばれる。	
まねきねこ 招猫	片前足をあげて座っている姿の猫の像で、幸福を招来するという縁起物のひとつ。猫が顔をなでる姿を人を招く姿に見立て、商家の店先などに飾って商売繁盛を願う。	

名称	説明	さまざまな呼称
 かんさつ 鑑札	営業するために許可・免許を要する商行為が必要とされる許可証のたぐい。業種によって発行元もさまざまで、店頭に掲げて表示するものや、携帯するものなど、種類も多い。	
印判		
はん 判	印章・印判のこと。木や金属、石、角などに文字やしるしを彫刻し、朱肉やインクを付けて文書に押すことのできる印影をもって証明とする。	
 やきいん 焼印	金属製の印判で、火で熱して物に押し当て、焼き跡をつける道具。	
 すりばん 摺り板	ステンシルの用具。看板や木箱などに文字やしるしを刷りつけるために用いる板。	

名称	説明	さまざまな呼称
旅の用具		高橋典子
 どうちゆうぎ 道中着	旅行用の衣服。特に定まっていはいないが、江戸時代の男性では、紺木綿の袴、手甲、股引、脚絆、紺足袋に草鞋で、三度笠などを被った。女性は、三度笠あるいは頭巾、手甲・脚絆・白足袋・草履。男女とも浴衣を上っ張りに用いることが多かった。	
 どうちゆうがっぱ 道中合羽	主として江戸時代に用いられた旅行用の外套。	
 かさ 笠	道中の風雨や強い日差しを避けるために頭にかぶるもの。	
 てっこう 手甲	手の甲から手首にかけて覆う布。長旅で負担のかかる部分を保護するために使った。	
 きゃはん 脚絆	脛を保護するために巻きつけるもの。多くは紺木綿の四角い布で、紐やこはぜで固定する。旅では、脚絆を付けると歩きやすい。	
 はばき 脛巾	脛に巻きつけて保護するもの。一般に、ハバキは、ガマやイグサなどの植物や藁で編んだものをさす。湿気を通さず、保温力も高いため、雪中や雨の日の歩行に適している。	
 わらじ 草鞋	主に稲藁で作られる履物。前部先端から長い「緒（お）」が出ており、これを側面の「乳（ち）」と呼ばれる輪やかかと部分の「かえし」という輪などを通して足首に巻き固定する。長距離の歩行に適しているため、旅の必需品であった。	
 こうり 行李	竹や藤蔓、コリヤナギ（行李柳）などで編んで作った蓋つきの箱。旅においては小型の行李2つを紐でつないで肩にかけて「振り分け」というスタイルで持ちものを運んだ。	
 べんとうばこ 弁当箱	外で食事をするときに、家から飯や菜を入れていく器。個人用のほか、花見や行楽に持参するための、三段組み・五段組みの重箱形式のものもある。	
 はやみち 早道	旅行用具の一つで、腰に下げて使う小銭入れ。懐に入れておく財布よりも早く出せるということから、この名がついたという。くぼんでいる部分の上に帯が通り、上の筒状の部分ですり落ちないようにになっている。	
 やたて 矢立	筆と墨壺を合わせた携帯用の筆記用具。ふたを開けると墨入れになっており、筆は柄の中に収納される。	
 いんろう 印籠	薬を入れて持ち歩くための小型容器。腰に下げられるようになっている。	
 たばこいれ 煙草入れ	帯にさしたり腰に下げたりして携帯する喫煙用具。煙管入れと刻みタバコ入れ、携帯用の火打ち道具で一式となる。	
 すいとう 水筒	携帯に便利なように軽量化された水筒。紙縴りを編んだものに漆を塗って作られているものなどもある。	
 ぜにいれ 銭入れ	旅行用の財布。高額の小判を入れておくもので、道中は懐中にしまっておく。	
 けいたいしょくだい 携帯燭台	荷物がかさばらないよう、小さく折りたためるように工夫された灯火具。ほとんどはロウソク用で、旅先の宿屋などで書きものをしたり枕元で点したりした。	